

VI 成 果 と 課 題

1 北加賀の中期後半の土器様相

筆者は多量に出土した本調査出土の土器の整理をする機会を与えられながら、それをまとめ上げることが出来なかった。よって本稿も整理されたものでないことを先におことわりしておく。一応古府式以降を中期後半とし、北加賀における土器様相について本調査出土土器の整理において気づいた点をいくつか述べたい。

古府I式とII式については前章で少し触れたので古府II式からについて述べたい。古府I式とII式は大ざっぱに言えば櫛状刺突文を持つか持たないかという理由により2分される。ところが能登ではこの櫛状刺突文は赤浦遺跡(四柳他1977)、真脇遺跡(南1986)^(註1)で非常に少ないことが明らかになっている。また、上山田式期の地域性も真脇遺跡(南1986)^(註3)の報文で明らかにされた。逆に南加賀では筋生遺跡(西野1978)、藤ノ木遺跡(中村準一他1985)^(註5)で櫛状刺突文を持つ土器が卓越することが明らかにされている。本遺跡や北塚遺跡(南他1977)、古府遺跡(沼田1970、南他1974)^(註7)でこの手の土器が出土している。しかし、これら北加賀で見られるものは2つのタイプがあり、前代と同様な半隆起を同一器面内に有するものと、幅広で背の低い半隆起線や棒状工具による沈線を同一器面内に持つものが存在する。後者は南加賀では見られない。富山県の状況はほぼ北加賀と同様と思われるが細い様相はわからない。

古串田新式は南加賀ではあまり検出例がない。北加賀、能登、富山ではいくつかの完形個体が存在する(南1985、小島1983、森1984)^(註10)。しかし、これらの土器からは能登で検出されている串田新I式の波状口縁の深鉢や平縁の深鉢の出現は可能でも北加賀や富山で検出されている波状口縁の深鉢の出現は不可能である。と言うのは、小島が串田新I式、II式を分離するための大きなポイントとした把手を持つものが一つもないこと、口縁に沿う隆帯は2本が並走するのみで、串田新I式の把手や隆帯によって口縁に沿う長楕円の区画の前段階と考えられるものが一つもないことなどから考えられる。串田新I式の波状口縁の深鉢に最も近い前段階の個体を掲げるとすれば藤ノ木遺跡の報文のP39第17図の土器ぐらいしか現在の所見当らない。筆者にはこれがどう言うことなのかわからない。

串田新I式、II式の前後関係は筆者にはよくわからない。平縁深鉢については森編年(森1984)^(註13)の時間の流れを信用したいのだが、本調査で確認された口縁に貝殻腹縁文を施す土器のほとんどが幅広の半隆起線と棒状工具による沈線の組み合わさったものであり、少ないながらも森編年III期と考えられるものにまでそういう例が見られ、またこの手の土器が赤褐色から黄褐色を呈し、細い風化した砂粒を多く含むものばかりであるため、なにかしら駁然としないものが残る。この胎土の物が能登に多いという指摘もあり、もしそうであるならこの手の土器は能登系の土器と言わざるを得ない。波状口縁の深鉢については前述した点や、波頂部が半円状に落ち込む土器が古府式の段階から存在することなどの理由ではっきりした基準のもとに分類し得なかったためよくわからない。胎土は平縁深鉢類似のものもあるが、これとは別のものが多い。

大杉谷式は本調査の第7号住居址の状況からほぼ串田新I式期には確実に存在し、第7号住居址出土の土器を右近次郎遺跡(工藤他1985)^(註15)のものに比べると、第7号住居址出土例がやや新しい様相を持つことなどから、その成立は遅くとも古串田新式期と考えられる。しかしながら本調査での出土量は少ない。また、白山上野遺跡(吉岡他1968)^(註16)で検出されてる変様した大杉谷式と考えられるものが個体数は少ないながら出土している。類似のものは河内村板尾遺跡で完形器が出土している。しかし、右近次郎遺跡ではこの手が検出されていない。同じ葉脈状文を施す土器でも富山県で検出されている平縁で口縁部を無文とし頸部にめぐらせた隆帯下を葉脈状文とする土器は本調査においては確認出来ず、北加賀での検出例も確認出来なかった。波状口縁器形の土器で葉脈状文を施す土器も富山県で検出されているものと異なっている。葉脈状文を施さないタイプの土器も両者には何かしら

違和感を感じる。小島氏や高堀氏が中期後葉期を三地域に分けているが、もっと細かな小地域に分割されているのではないかと感じられる。能登では、北加賀、富山とは全く異質な串田新式が成立していることが真脇遺跡の報文（^{註19)} 加藤 1986）^{註20)} で明らかにされている。しかし加藤氏の述べるように加藤氏の言うIII期やIV期からではなく、加藤氏のI期、おそらくII期からは北加賀とは異なった土器群が存在すると筆者には思われる。共通性をもつのは加藤氏のいうB類器形のもののみである。これはおそらく上山田式から古府式、串田新式、前田式と続く大きな流れと理解出来るのではないだろうか。

前田式がどの様な串田新式の土器から出現するのか、筆者にはその系譜が追い切れないのだが、1つの可能性として東市瀬遺跡（^{註21)} 南 1985）第2号住居址出土の報文P 69～P 70第41図4の様な土器が平縁化して本調査第3号住居址炉床の第45図562の様な土器が成立したと考えている。しかし、本調査E-1区出土の第54図799の様な土器からの流れも存在して当然と思われる。本調査で前田式が北加賀でも完形個体として出土する事実が明らかになったが、前田式が中期末か後期初頭かという問題を解決する資料は得られていない。本書では一応中期に含めておいたがそれは富山で大木10式系の土器と共に伴しているという事実を重視したからである。しかし、逆に南加賀の辰口町茶臼山遺跡（^{註22)} 西野 1982）では包含層中ではあるが、中津式類似土器と共に伴しているということもあり、いまだ中期末後期初頭と言わざるを得ない。串田新式期からは一応、富山、能登、北加賀、南加賀、手取川上流部と5地域ぐらいに分けられると思うのだが土器の系譜をつかみ得ていないのではっきりとこう述べることは出来ない。

これらとは別に串田新式～前田式期の土器様相として特徴的な事例を上げるとすれば、所謂異形土器の顕在化（^{註23)} 上げる）^{註24)} が出来る。本調査ではあまり出土例がないのだが、笠舞遺跡の第2・3次調査、あるいは東市瀬遺跡では、壺、鉢、壠、釣手などバラエティーに富む異形土器が検出されており、転換期の様相を示すものとして重視しておきたい。

以上述べてきたが、整理出来たものではないためはなはだわかりにくいものとなってしまった。地域性は上山田式期の段階において、能登と他地域の違いとして出現するが、他地域とした地域とした中でもおそらくこの期に何らかの違いが出現しているものと思う。北加賀、南加賀での調査例が少なくはっきりとはさせられないのだが。この違いが、古府式の後半（？）に入って顕在化し、串田新式の段階では同じ様式内でタイプの違う土器を持ち、様式の異なる土器の共伴状況を違えるという形で、能登、富山、北加賀、南加賀、手取川上流部という地域性が明確になる。中期末～後期初頭の段階ではこの地域性が解体する方向に向うがまだ解体までにはいたらず、気屋式の段階で解体と新しい様相の出現ということが言えるのではないかと思う。これを具体的に指示示すためには器形と文様の系統的な変化を追いながら、どういう器形と文様を持つ土器がどの地域にどれくらいの比率で出土するのかを見ていく必要があり、それも文様の描出技法や胎土の差などの細い分析を行い、どのようなレベルでの差なのかをはっきりさせたものでなければならないものと考える。そのためには小林達雄氏の様式論的考え方（^{註25)} ）^{註26)} が必要であると感する。

最後に本稿を記すに当り、南久和氏、米沢義光氏、山本直人氏、柄木英道氏、北野博司氏、越坂一也氏、久田正弘氏から有益な教示を受けながらそれを生かすことが出来なかった。御礼を述べるとともにおわびしたい。

註1 四柳嘉章他 1977 『赤浦遺跡』七尾市教育委員会

2 南 久和 1986 「第11群土器 古府式期」「真脇遺跡」能都町教育委員会

3 南 久和 1986 「第10群土器 上山田・天神山式期」「真脇遺跡」能都町教育委員会

4 西野秀和 1978 『筋生遺跡』辰口町教育委員会

5 中村準一他 1985 『藤ノ木遺跡』加賀市教育委員会

6 南 久和他 1977 『北塚遺跡』金沢市教育委員会

7 沼田啓太郎 1970 『古府遺跡』金沢市教育委員会

8 南 久和他 1974 『金沢市古府遺跡』金沢市教育委員会

9 南 久和 1985 『北陸の縄文時代中期の編年』南 久和著作集第1集

10 小島俊彰 1983 「串田新I式・II式は逆転するか」「北陸の考古学」

11 森 秀典 1984 「北陸の縄文時代中期後葉『串田新式』に関する編年試案」「大境」第8号

- 12 註 5 と同じ
- 13 註 11 と同じ
- 14 北野博司氏 栃木英道氏 久田正弘氏の教示による
- 15 工藤俊樹他 1985 『右近次郎遺跡II』大野市教育委員会
- 16 吉岡康暢他 1968 「石川県石川郡鶴来町白山上野住居跡第1・2次調査概報」『石川考古学研究会誌』第11号
- 17 山本直人氏の教示による。氏の御好意により実物と実測図を拝見させていただいた。
- 18 註 15 と同じ
- 19 小島俊彰 1964 『高岡公園小竹蔽縄文遺跡』高岡市教育委員会、高堀勝喜（1965）「縄文文化の発展と地域性—北陸—」『日本の考古学』
- 20 加藤三千雄 1986 「第12群土器 串田新式期・宇出津式期」『真脇遺跡』能都町教育委員会
- 21 南 久和他 1985 『東市ノ瀬遺跡』金沢市教育委員会
- 22 上野章他 1976 「有田ヶ原一D遺跡」『富山県福光町・城端町立野ヶ原遺跡群第四次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会
- 23 西野秀和 1982 「辰口町下開発茶臼山古墳群」辰口町教育委員会
- 24 南 久和他 1981 『金沢市笠舞遺跡』金沢市教育委員会
- 25 註 21 と同じ
- 26 小林達雄 1977 「5. 型式、様式、形式」『日本原始美術大系1』

2 笠舞A遺跡出土土器の位置づけについて

北陸の縄文時代の土器編年は、昭和25年の鶴来町舟岡山遺跡の発掘調査以来、石川県の石川考古学研究会や富山県の富山考古学会の活動によって、その大綱は固まりつつあるように見える。表採資料や一坪発掘等による資料の集積と研究による型式編年は、大規模開発に伴う緊急調査による莫大な発掘資料によって内容が豊富になったと考えられるものの、文様を軸として立てられてきた編年は、その内容の把握をめぐり、地域間の差異を含めて、研究者間で微妙な落差が生じてきていると考えられる。小島俊彰氏が「北陸の縄文時代中期の編年」の中で述べられているように、現状は「各型式の細分と再検討期」の延長上にあると思われるもので、研究者の世代交代にともなって各個別型式の研究史的見なおしや、標式遺跡出土資料の再検討が加えられている段階と言える。それは、標準資料の初出時の考古学的限界をとりはらうもので、各型式の史的評価を含めた形で提起されてきて(註1)いる。これらの動きのなかで、従来の型式編年手法とは異なる様式概念手法が、小島俊彰氏によって宇ノ気町上山田貝塚の報告でなされていて、その後の型式認識に少なからぬ手掛けを与えている。が、一方では、高堀勝喜氏による語句の使用に関しての批判が加えられ、南 久和氏による型式と型式の境目が不鮮明であるとの様式概念そのものへの疑問が表明されている。北陸地域での型式編年は既述したように資料の絶対的不足から文様を軸として組まれており、型式設定が主觀の表明におち入るおそれを多分に内包しているのは否定しきれない事実と考えられる。型式間を鮮明にするためには、固定的な型式編年をいったん取りはずした形での認識も一手法として積極的に考えてゆきたいと思う。

1986年、北陸の縄文時代研究の画期となる能都町真脇遺跡の調査報告書が発刊された。県内の気鋭の研究者による土器編年が、研究史や分布図をふくめて報告されており、最新の研究成果として学びながら、本遺跡出土土器の編年的位置づけを考えてみたい。なお、本遺跡出土土器の整理報告は、本田秀生君の成果であるが、筆者との編年観とは若干の齟齬があり、ともに建設的な御批判を仰ぐものである。

朝日C式土器は、同一個体と見られる2片の検出があった。本遺跡の形成時期を、前期中葉にまでさか上らせるものである。富山県大門町小泉遺跡を除いては、断片的な資料の検出にとどまり、県下においての概期の遺跡は、羽咋市寺家遺跡、志雄町荻島遺跡、中島町大杉谷遺跡等の能登地域での検出が多く、北加賀における初例として注目される。西日本系の北白川下層IIa式土器、東日本系の黒浜式土器と併行するものとされるが、地域によって東西土器の比率がどのように変化するのかは今後の課題のひとつと思われる。

福浦上層式土器は、昭和43年に浅井勝郎氏が報告した資料のなかに見いだされ、また、第2・3次調査報告のなかでも数点が得られているもので、本遺跡の形成のはじまりとして考えられてきたものである。縄文地文に結節浮線文を付するもので、鋸歯状印刻文土器とともに福浦上層式の指標とされてきたものである。近年の調査事